第三十二講　読後作文

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの1～6の問いに答えなさい。

デジタルの中に蓄えられる莫大（ばくだい）な情報を、人間に新たに与えられた「外部脳」だと解釈し、これが人間の脳の効率化につながるのだという見解が増えた。外部脳を持てば、自分の脳を記憶装置にせず、思考の場として徹底できる、そう考える専門家も少なくない。

情報ア‖にたどり着くまでの労力や時間を軽減できるようイ‖になったことのメリットは大きい。そのメリットとは、たんウ‖に楽エ‖になったということだけではなく、情報へたどり着く労力や時間が軽減されることで、自分の頭で思考するエネルギーや時間を生み出す余地が大きくなったことだ。しかし、思考のチャンスを無駄にしたり、極端な「外部脳」依存に陥ると、それはデジタルに人間を奪わせる格好の材料になる。もう既①に、味方であるはずのデジタルに、知らず知らずのうちに人間がむしばまれているのかもしれない。表現はいささか強烈かもしれないが、われわれが未来にわたってデジタルと良い関係で共存していくために、ここで気づいておかなければならないことがある。それこそが、（注）「人間は考える葦（あし）」でなければならないということだ。デジタルがもたらす利便性に溺（おぼ）れずに、「思考する努力」を重ねることだ。

社会が近代化し、便利な移動手段が発達したことで、人間は慢性的な運動不足に陥り、それに伴う新たな病を患（わずら）うようになった。その対策として、人間はビルの中にトレーニング施設をつくり、「運動する努力」を強いられるようになった。「思考する努力」も、もはやそれと同じ域に突入しつつある。

そして、「思考する努力」の前に、ある一定の情報や知識は〝自前化（じまえか）〟する価値があることも理解しておきたい。外部脳の有用性は僕も認めるところだ。外部脳はわれわれの脳を補完し、考えるための土台を強化してくれる。しかし、自前化された情報や知識は、画期的

な連想を生む礎（いしずえ）となり、優れた創造をなすテコとなる。これは外部脳主体では難しい。②外部脳は、われわれにとって新たなアドバンテージであることは間違いない。自前化できる情報や知識の限界を外部脳がカバーしてくれる。ただしそれは、自前化した情報や知識の基盤があってこそのものであることを忘れてはならない。外部脳はあくまでもその補強の材料に過ぎない。自前化した基盤と外部脳、それらと思考が掛け算されてこそ、優れた創造をなすことができる。

人間の力をデジタルに奪われず、［ａ］デジタルを人間の新たな力とするために、われわれはここで思考することの意味を見つめ直さなければならない。そんなことは分かっている、いまはそう思っていたとしても、われわれが一度乗り込んでしまったこのデジタルの船は、時に激しく揺れながら、思いもよらぬ速度で海の上を進んでいく。その中でわれわれは、「デジタルの船は極楽さ。ここが危険だなんて大げさだし、自分には無縁の話だよ」とついつい③たかをくくって過ごしてしまう。そうこうしているうちに、この船はあっという間に周りの景色を変えてしまう。景色のめまぐるしい変化に振り回されているうちに、人間にとって重大なことをあっさり失念させてしまう。いやそれどころか、失念していること自体にすら気づかせてくれない。このデジタルの船の中で、「思考する習慣」を維持し続けるということは意外と難しいのである。

しかし、「思考する習慣」というものは、ちょっとした努力の積み重ねで培（つちか）われるものだ。

［ｂ］、インターネットの検索で発見した情報をうのみにせず、取り入れるべき情報を取捨選択し、選択した情報の背景や核心を探ることも思考を磨くプロセスとなる。何から何まで検索ばかりに頼らず、時にはまず自分の頭で考えてみたり、まとまった読書から情報や知識を自前化する機会を持つことも良い。

また、文章を書く場合はちょっと自己改革し、定期的に長めの文章を書いてみる。二千字、三千字と、段階的に文章量を増やしてみる。一定量の文章をしっかり書くという作業は、必然的に思考を伴うものだ。

このような小さな習慣の積み重ねであっても、デジタルの船の中で思考する力を維持、育てることはできる。

本来、デジタルの船に乗り込んだわれわれには、これまでの偉大な創造よりももっと偉大な創造を成し遂げるチャンスが与えられているはずだ。デジタルの船がわれわれを導こうとしている世界は、きっと新たな可能性にあふれた大陸なのではないだろうか。その大陸にたどり着くための原動力は、人間の思考だ。デジタルの船の中でこそ、思考することの価値を理解し、情報や知識と思考の掛け算という

④テコの原理を働かせよう。それにより、すばらしい発見や発明、創造がなされ、よりよい未来が切り拓（ひら）かれるはずだ。デジタルに人間を奪われるのではなく、豊かな未来のためにデジタルを生かす。人間から思考する力を奪うデジタルの力学は、まるで未必の故意（注）のようだ。しかしそれは、われわれ人間自身の気づきと努力で回避することができる。だからこそ、人間は考える葦であり続けなければならないのだ。

（小川和也「デジタルは人間を奪うのか」より）

（注）「人間は考える葦」＝十七世紀フランスの学者パスカルの言葉。人間は弱い葦（水辺に自生する植物）のようであっても、考えることによって何ものよりも強い存在になっているという意味。

未必の故意＝本来は法律用語であるが、ここでは、積極的な意思はなくても、そうなっても仕方がないという消極的な意思はあると見られるという意味。

1　――線部①「に」と文法的に同じ用法のものを、本文中の＝＝線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

□

2　本文中の a ・ b にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　a　むしろ　b　たとえば　　イ　a　せめて　b　だから
ウ　a　まるで　b　あるいは　　エ　a　つまり　b　しかし

□

3　――線部②「外部脳は、われわれにとって新たなアドバンテージである」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　外部脳は、思考の基礎となる自前化された情報や知識では充足しきれない領域を補強するという点で、役に立つということ。
イ　外部脳は、一定の情報や知識を自前化すると同時に思考の基盤を作り上げる働きをしているという点で、便利だということ。
ウ　外部脳は、労力や時間をかけずに新たな情報や知識を自前化して思考を維持しているという点で、合理的であるということ。
エ　外部脳は、思考する努力をしなくても自前化できる情報や知識の連想を生む基礎となるという点で、都合がよいということ。

4　次の文は、――線部③「たかをくくって過ごしてしまう」について説明したものである。Ⅰ・Ⅱに適当な言葉を補え。ただし、Ⅰは本文中から四字の言葉を抜き出し、Ⅱは十字以内の言葉を考えて答えること。

社会の中で急激な発達を遂げたⅠの利便性にとらわれた人間が、Ⅰによって Ⅱ という危険性を軽視して、自分には関係ないものとしてやり過ごしてしまう様子。

Ⅰ

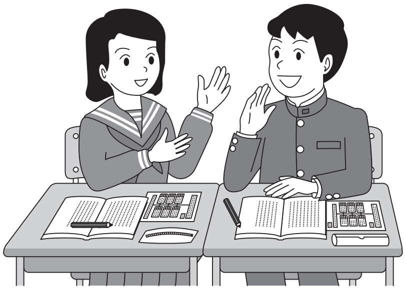
Ⅱ

5　――線部④「テコの原理を働かせよう」とあるが、これはどういうことか。六十五字以内で書け。

6　本文を読んだあとに、～～線部に関連して、AさんとBさんは次のような意見を述べた。これを参考にして、今後インターネットを活用する上でどのようなことを心がけたいか、あなたの考えを書け。ただし、あとの(1)・(2)の条件に従うこと。

Aさん
インターネット上には大量の情報があるから、簡単にそこから情報や知識を得ることができるね。

Bさん
インターネット上には大量の情報があるけれど、自分の頭の中に情報や知識をもっていることが大事だね。



条件
(1) 六行以上八行以下で書くこと。
(2) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

8	7	6	5	4	3	2	1

【鹿児島県】

Step 2

二　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

複雑適応系としての*エコシステムがどのように成り立っているのかの研究は、生態学の大きなテーマである。複雑適応系は、文字通り複雑であり、単純な法則を当てはめることによって、その動向が予測可能とはならない。しかし、生物群集やエコシステムの理解は、私たち人間がどのように環境を利用すればよいのかという、現代文明の直面する大問題の解決に不可欠である。（第一段）

人間という種、ホモ・サピエンスがこの地上に出現してから、まだ二十万年しか経っていない。人間は、狩猟採集を生業として暮らし、他の動物と同じように生態系の一員として、複雑適応系の中に組み込まれて生きてきた。しかし、およそ一万年前に農耕と牧畜が発明され、定住生活が始まった。人間は、大規模に自然を改変するようになった。以後の一万年に、都市が生じ、工業化が起こり、化石燃料を燃やすことによる新たなエネルギー源が使われるようになった。この変化、文明の発展により、環境問題が認識されるようになった。（第二段）

環境問題は、まずは公害問題として認識された。それは、日本における水俣病に代表されるように、長らく原因が分からず多くの人々が苦しむ結果となった。それでも、最終的には、汚染の原因が水銀であり、なぜそのような悪影響が出るのかが、研究の結果はっきりと理解されたため、法律で原因物質の流出を規制するという解決に至った。その他の環境毒性物質の規制についても同様である。これは、毒性物質と健康被害との関係が明確で単純であるため、一度理解されると対応策が明らかになり、それに賛同する民意も容易に形成された例であった。（第三段）

次に、乱獲による動物や植物の絶滅という問題が認識されるようになった。それも、その種の捕獲や採集、取引などを法律で制限することで解決に向かった。人間の生存にさして必須でもない物品の商取引によって生物が絶滅の危機に瀕していることが知られると、それをやめて生物の絶滅を防ごうという民意は簡単に形成される。象牙、*鼈甲などの製品の取引が禁止されたことなどはその例であろう。ほかにも絶滅の危機に瀕している生物種はたくさんあるが、なぜある程の生物が選ばれて人々の注目を集めるのかには、一般の人々がその生物に対して抱いているイメージや好感度など、科学的ではない問題も大きな影響を与えている。（第四段）

しかし、二酸化炭素の排出による地球の温暖化と気候変動や、生物多様性の減少の問題は、公害や特定の種の絶滅の問題よりもずっと多岐にわたる要素を含んでいる。(1)それは、複雑適応系の動向に関する問題であり、単純な因果関係の理解にはならないのである。(第五段)

本来は自然界で使われることのなかった化石燃料のエネルギーを使うことは、エコシステムという複雑適応系にどのような影響を与えるのか。多様な種が相互作用して成り立っているエコシステムの中で、生物多様性を減少させていくと、システムはどうなるのか。このような大きな問題の認識が、「持続可能性」という概念を生じさせた。それは、単なる環境中の毒物の規制や特定絶滅危惧(きぐ)種の捕獲禁止などではなく、より広く、この複雑適応系を崩壊させずに、なるべく現在の豊かさを保ったまま次の世代の人間たちに受け渡していくにはどうすればよいのかという、より広い視点での環境問題のとらえ方であろう。(第六段)

エコシステムにおけるエネルギーと物質の流れが何億年という時間の中で作られてきたことを考えれば、人間は、生物進化の歴史の中ではほんの一瞬とも言える年月の間に、大量のエネルギーを使い、いろいろな物質の循環を乱している。地球の複雑適応系はどうなるのだろうか。生物間の相互作用が非常に複雑にからみあった結果としてエコシステムがあるならば、その内部に存在する多くの種を絶滅させ、食物網を単純化させていくと、システムはどこに向かうのだろうか。(2)これを続けていってシステムが激変を起こすようであれば、持続可能とは言えない。(第七段)

地球の生態系は、人間の生存に適するように作られているわけではない。たまたま、現在の人間が、現在の生態系に適応して生きてきただけだ。地球生態系は、何があろうと、いろいろな変化を経て持続していくだろう。その意味で、地球生態系の持続可能性が問題なのではない。問題は、人間という生物が心地よく生きていけるような環境の持続可能性だ。そのような環境状態は、永遠に続くものではない。人間自身が環境を変化させることにより、その状態は変わってしまうかもしれない。人間の生存に適した環境をのちの世代まで続けて残していくことが、持続可能性の考えの根幹である。(第八段)

そのために、現在の生物多様性を保っていくことが重要であることは、おぼろげながら認識されている。しかし、生物多様性を保つことの重要性についての厳密な科学的理解は、まだ十分ではない。生態系の中には多くの種が存在するが、それらは生産者、第一次消費者、第二次消費者などの異なる機能を果たしている。しかも、そのような関係は、「食物連鎖」という言葉から想起されるような、下から上へ

の単純な直線的関係ではなく、まさにさまざまな生物種が網の目のような複雑な関係に取り囲まれている関係なので、現在では、「食物網」という言葉の方がよく使われる。（第九段）

なぜ網の目のようになるかと言えば、多くの生態系は、種の組み合わせが異なるいくつもの食物連鎖のつながりを包含しているからだ。その意味で、いろいろな種の機能が重複している。つまり、冗長性が高いのである。また、同じ地域の中でも異なる種の組み合わせによる集合が、それぞれ関係の濃さに濃淡をもって存在している。つまり不均一な構造をもっているのである。機能の冗長性と構造の不均一性が、生態系全体に、かく乱に対する強さ、*レジリアンスを与えていることは分かってきた。（第十段）

同じような機能を果たしている種が何種もあるのならば、それらの一つが絶滅してもたいした影響はないと考えられるかもしれない。しかし、冗長性は、かく乱に対する抵抗力の強さとして働いている。*ポール・エールリックがたとえ話として表現したように、飛行機の胴体をつないでいるリベットはたくさんあり、一つや二つを抜いても飛行機は保たれるだろう。しかし、何十個と抜いていくと、あるとき飛行機は*瓦解（がかい）する。(3)それと同じに、生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではないのだ。（第十一段）

（長谷川眞理子「生態学から見た持続可能な社会」より）

〔注〕　エコシステム――生態系。
鼈甲（べっこう）――タイマイというカメの甲羅。
レジリアンス――回復力。
ポール・エールリック――アメリカの生物学者。
瓦解（がかい）――ばらばらになってしまうこと。

〔問1〕 (1)それは、複雑適応系の動向に関する問題であり、単純な因果関係の理解にはならないのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　乱獲による動物や植物の絶滅の問題は、人々の抱くイメージが関係するなど、科学的ではない理由が大きな影響を与えるということ。

イ　生物多様性の減少など多くの要素を含む問題は、原因の排除で解決するのではなく、より広い視点でとらえるべき問題であるということ。

ウ　次世代が豊かな生活を持続できないという問題は、原因が複雑にからみ合っているので、人間には理解困難な問題であるということ。

エ　公害や特定の種の絶滅の問題は、様々なシステムがからむ複雑な問題であり、簡単に解決できるようなものではないということ。

〔問2〕 (2)これを続けていってシステムが激変を起こすようであれば、持続可能とは言えない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　人間が大量のエネルギーを使うことによって物質の循環を乱すと、地球生態系は持続できなくなってしまうと考えたから。

イ　種の絶滅によって地球環境が変化しなかったとしても、人間は現在の生態系にいつまでも適応できるとは限らないと考えたから。

ウ　エコシステムの中にある生物種が減少して食物網が単純化すると、地球環境がどのように変化するのか予測できなくなると考えたから。

エ　人間は現在の生態系に適応して生きているが、環境を大きく変化させると人間の生存には適さない環境になってしまうと考えたから。

〔問3〕この文章の構成における第九段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　前段で述べた主張について、その解決の基本的な道筋を示すとともに、新たな視点を提供することで文章全体の結論を導いている。
イ　前段で述べた主張について、新たな具体例を挙げるとともに、さらに詳しい説明を加えることで論を分かりやすくしている。
ウ　前段で述べた主張について、その根拠となる事例を挙げるとともに、一般的な見解を示すことで論の妥当性を主張している。
エ　前段で述べた主張について、批判的な立場から意見を示すとともに、新たな具体例を挙げることで話題の転換を図っている。

〔問4〕(3)それと同じに、生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではないのだ。とあるが、「生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではない」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　生態系の中で異なる種の関係が不均一な構造をもてば、いくつかの種が絶滅しても生態系全体への影響はほとんどないと考えたから。
イ　生態系を構成する多くの種の機能は重複しているが、環境の持続のためにそれぞれの種に異なる役割が与えられていると考えたから。
ウ　機能が重複している多くの種の存在は、環境が多少乱されても生態系の激変を防ぐ抵抗力の強さとして不可欠であると考えたから。
エ　機能が重複している種の数がどんなに多くても、一つ二つが絶滅してしまうだけで生態系が直ちに激変してしまうと考えたから。

〔問5〕　国語の授業でこの文章を読んだ後、「環境の持続可能性」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「なども それぞれ字数に数えよ。

（200字の原稿用紙：25／100／200）

【東京都】

Step 3

三　次の【Ⅰ】、【Ⅱ】の文章は、コミュニケーションの取り方について書かれたものです。これらを読んで、〔問1〕～〔問8〕に答えなさい。※印には（注）がある。

【Ⅰ】

日本人の文化は〈察しの文化〉です。

たとえば、君が日本人に電話して、「夕方六時に記者クラブで会いたいのですが」と言ったとする。もし彼が「ああ、六時ですか、記者クラブでね……」と聞き返し、なにか口ごもったら、すぐ「もしご都合が悪ければ、他の時間に他の場所でもいいんですが」といわねばならない。

すると、相手は「いいえ」といわず、喜んで「はい」と答え、都合のいい申し出にすぐ応ずる。（オフチンニコフ『サクラと沈黙』）

じつによく日本文化をA飲み込んだ外国人の評です。相手が口ごもったら「都合が悪いんだな」「気が進まないんだな」と素早く察して（気持チヲ汲(く)ンデ）別の提案をしたほうがよい。それが気ヲキカセタ、気ノキイタ対応で、「自分を相手の立場に置く心」の発揮です。

口ごもった途端に相手の心中を読む、それは以心伝心です。その極致※は、全然ことばを介さないコミュニケーションで、映画『男はつらいよ』の主人公、寅(とら)さんは、アメリカではプロポーズするのもことわるのもハッキリ口で言わなければいけないと聞かされて「へーえ、B不器用なやつらだねえ」と呆(あき)れます。「オレだったら目で言っちゃう。あなたのこと愛してます。向こうも目で答えるな、アタシあなたのこと好きになれませんの。また目で答える、わかりました。黙って去るな」というのが寅さんの美学で、日本人の観客は笑い声のうちに理解・共感を示します。目ハ口ホドニ物ヲ言イの境地のよさを知るからです。

相手の心中を先まわりして察する心は必然的に他者へのイタワリに通じます。他者の気持ちを傷ツケルことを極力避けようとして、

C言うべきことを率直に言うことまで控えます。そして、率直でないと指摘された時、多くの日本人の釈明は「だって、悪イもの…」です。ドイツで一九七二年の夏、デュッセルドルフのホテルから大学へ電話をかけたところ、何の間違いか、別のところへつながってしまった。「大学ですか?」と言ったら、女性交換手は「アッハッハッハッ」と笑い飛ばして、「ここは空港だ」と言います。交換手が、いや交換手でなくても、「アッハッハッハッ」とは何事ぞ。日本人にすればまことにハシタナイ、タシナミのない行為です。こんな時、日本人が固くマナーを守るのは、自身の品位を大事にすると共に、相手を傷つけまいとするイタワリの心に根ざしています。

日本研究の専門学者C・フィッシャー教授は、ドイツから来日したある年の夏、新宿の有名な天ぷら屋のカウンターで夕食をし、脱いだ上着をカウンターの下に置き忘れてしまった。翌日、店に行ってみたら上着は置いたままの位置にあったので、やれやれと※安堵し、忘れ物を持って帰ると店員に告げたら、店員は恐縮して「これはどうも、D手前どもの気がききませんで…」と詫びたそうです。客がうっかりしていたのに、店の側で謝ってくれるとは、忘レタノハアナタノ責任ダとばかり冷淡な西欧社会と何たる違い、と同教授の日本びいきはまたも度を加えたようでした。

（芳賀綏「日本人らしさの構造」より……一部省略等がある。）

（注）・極致＝最終的に到達するところ。
・安堵し＝安心し。

【Ⅱ】

ドイツの漫画には必ず遅刻した理由を※滔々と三十分もしゃべる子供の話が出てくる。もちろんそれはみんな言い訳つまり嘘なわけです。しかし、日本ではこれは漫画にすらならない。言い訳そのことを嫌うからです。ましてくどくどした言い訳は※蛇蝎のように嫌う。私は日本社会は、子供のころに言葉の無力さを徹底的に教える社会だと思っております。何かを語らせて反対するのではない。語らせないようにする社会なのです。全体の空気を察して、言葉以上のものによって動くことを要求する社会なのです。

私は客観的なデータに基づいて科学的な議論をしたいのではない。このことは、十年以上にわたってさまざまな大学や専門学校などで、

日々若い人々を目の前にして痛感していることです。ドイツ語や哲学※の授業では、みな何の質問もせずおし黙っている。その雰囲気が耐え難（がた）く、絶対怒らないから、しゃべらない人は減点にするから、「黒板の字が見えません」とか「もう一度言ってください」と発言するだけで点をあげるからとまで言っても、凍りついたように座っている学生たちを前に、私は泣きだしそうになります。周囲の視線が注目する中で「なぜ」と聞けない、「おかしいよ」と言えない、「私はそう思いません」と言えないのです。E哲学や語学を知識としてしか学ぼうとしない。その生命ともいうべき「言葉による自己表現」を徹底的に摘（つ）み取られてきたのだなあ、と感嘆にも似た思いがします。

ある日電車の中で大声で怒鳴（どな）る声を耳にしそちらに目をやると、八十過ぎのお婆（ばあ）さんを目の前にして学生らしい若者がそ知らぬ顔で脚を投げ出して座っている。それを、腹にすえかねた中年の男が「君いっ！」と怒鳴ったもののようです。ウィーンでは老婆が席を譲るように若者に「命令」しますが、私はそこまでは要求しません。F私はこの中年の男のやり方がまずいなあと思ったのです。彼はなぜ怒鳴ったか、それは若者が老婆に席を譲らなかったからというより、彼女の気持ちを「察しなかった」からなのです。言われなければわからないようでは駄目（だめ）なのです。あの大声は、若者のこうした鈍感さに向けられたものでしょう。中年の男は、ただ若者に冷静に要求すればよいのです。場合によったら、彼はそれなりの理由で座っているかもしれないではないですか。しかし、多分怒鳴った男はいかなる彼の言い分も聞かないことでしょう。学生も何の弁解もせずに立ち上がった。彼は何を学んだか。今日もまた公衆の面前で「言っても無駄なこと」を学んだのです。

われわれは明治以来、西洋哲学は熱心に輸入したかもしれない。しかし、西洋哲学の底に脈々と流れる「議論」や「弁論」の伝統はいまだこの国に上陸さえしていないのです。言葉や弁論を圧殺※するわが国の現状をいたるところで目撃するにつけ、われわれは「言葉」に生命をかけるべきこと、どこまでも「議論」や「弁論」によって真理に至（いた）るべきことを、まだまだ学ばなければならないように思われます。

（中島義道（なかじまよしみち）「哲学の教科書」より……一部省略等がある。）

（注）・滔々と＝よどみなく。
・蛇蠍＝へびとさそり。人が恐れ嫌うもののたとえ。
・哲学＝世界や人生の根本原理を研究する学問。

・圧殺する＝（他人の意見などを）押さえつけて無視する。

〔問1〕【Ⅰ】の文章中のA飲み込んだと同じ意味で使われているものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　言いたいことはあったが、言葉を飲み込んだ。
イ　おいしそうな物を見て、生つばを飲み込んだ。
ウ　イベント会場は、五万人の観客を飲み込んだ。
エ　何回かやるうちに、作業のこつを飲み込んだ。

□

〔問2〕【Ⅰ】の文章中、B不器用なやつらだねえとありますが、寅さんがアメリカの人々を不器用だと言うのは、どのようなやりとりを望ましいと考えているからですか。そのやりとりを言い表した語句を、【Ⅰ】の文章中からそのまま抜き出して、二十字以内で書きなさい。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

〔問3〕【Ⅰ】の文章中、C言うべきことを率直に言うことまで控えますとありますが、このことについて、次のａ、ｂの古文を読み、あとの⑴、⑵に答えなさい。

ａ　あらそふべき時あらそひ、随（したが）ふべき時随ふ、これを忠とす、これを孝とす。（「十訓抄」より）

（随ふ：従う　忠とす：忠誠という　孝とす：孝行という）

ｂ　物に争はず、己をまげて人に従ひ、我が身を後にして、人を先にするには及（し）かず。（「徒然草」より）

（物に：他人と　人を先にするには及かず：他人に先を譲るに越したことはない）

⑴　ａの文中のあらそひを現代仮名遣いに改めなさい。

⑵　C言うべきことを率直に言うことまで控えますの内容に最も近いのは、どれですか。次のア〜エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　随ふべき時随ふ

イ　これを忠とす、これを孝とす

ウ　物に争はず、己をまげて人に従ひ

エ　我が身を後にして、人を先にするには及かず

〔問4〕【Ⅰ】の文章中、D手前どもの気がききませんで…とありますが、どのような点に気がきかなかったと店員は考えているのですか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　忘れ物がないか客が帰るときに確認するべきであったのに、それを怠って客に忘れ物をさせてしまった点。

イ　忘れ物があったら取り出して見えるようにしておくべきであったのに、そのまま元の場所に置いていた点。

ウ　忘れ物は客が取りに来る前に客の手元に届けるべきであったのに、店に取りに来させてしまった点。

エ　忘れ物は店の者が責任を持って管理して客に手渡すべきであったのに、客が自ら探すことになった点。

〔問5〕【Ⅱ】の文章中、E哲学や語学を知識としてしか学ぼうとしないとありますが、この表現によって筆者はどのようなことを述べようとしていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　哲学や語学は、専門的な知識だけでなく一般的な常識が必要であるのに、若い人々は学問を深めるための常識を軽んじる傾向にあるということ。

イ　哲学や語学は、言葉による自己表現を身につけるのが目的であるのに、若い人々は知識だけを得て表現をおろそかにしてしまっているということ。

ウ　哲学や語学は、自己表現によってお互いの気持ちを察していくことも大切なのに、若い人々は知識の習得の方を重要視してしまっているということ。

エ　哲学や語学は、自分の考えを言葉にして議論しながら追究するものなのに、若い人々は既成の知識だけを手に入れてよしとしているということ。

〔問6〕【Ⅱ】の文章中、F私はこの中年の男のやり方がまずいなあと思ったのですとありますが、この場面で中年の男はどのように行動することが必要だと筆者は考えているのか、二つ書きなさい。ただし、それぞれ二十字以内で書くこと。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

〔問7〕【Ⅰ】の文章中、もし彼が「ああ、六時ですか、記者クラブでね……」と聞き返し、なにか口ごもったらとありますが、日本人である「彼」のこのような態度に表れている相手に対する期待は、【Ⅱ】の文章ではどのように表現されていますか。期待の内容にあたる部分を【Ⅱ】の文章中からそのまま抜き出して、二十五字で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

〔問8〕【Ⅰ】、【Ⅱ】の文章に書かれた筆者の考えについて、あなたはどう考えますか。あなたが賛同する、または賛同しない方の文章を選び、なぜそのように考えるのか、根拠を明確にして書きなさい。

ただし、次の条件(1)〜(3)にしたがうこと。

［条件］

(1) まず、【Ⅰ】、【Ⅱ】どちらかについて、賛同する、または賛同しないという立場を明らかにすること。

(2) 原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。ただし、題名や自分の氏名は書かないこと。

(3) 八行以上、十行以内であること。

【和歌山県】

第三十二講　読後作文

Step 1

一

解答

1、ウ　2、ア　3、ア　4、Ⅰ、デジタル　Ⅱ、思考する力が奪われる（同意可）　5、これまでよりもっと偉大な創造をなすために、デジタルの有用性を生かして、情報や知識を自前化するとともに思考の機会を積み重ねること。（64字）（同意可）

6、（例）インターネット上には大量の情報があるが、その情報をうのみにしてそれだけで情報や知識を得たつもりになるのは危険である。自分で考えることを忘れず、読書などで知識を得て、インターネットの情報が本当に正しいのか、また、その大量の情報のどれが自分にとって必要かを、自分の知識に基づいて考え、取捨選択することを心がけたい。（8行）

解説

1、①の「に」は、「既に」という副詞の一部。アは、活用のない付属語の助詞。イは、活用のある付属語である助動詞「ようだ」の連用形の活用語尾。ウは、「たんに」という副詞の一部。エは、形容動詞「楽だ」の連用形の活用語尾。

2、aは、「奪われ」るのではなく、「新たな力とする」ほうがふさわしいことを表す。bは、「ちょっとした努力の積み重ね」の例を挙げている。

3、「アドバンテージ」は、有利な点という意味。「自前化できる…カバーしてくれる」と、くわしい説明が続いている。

4、ここで「たかをくくって」というのは、「デジタルの船は極楽さ。ここが危険だなんて大げさだし」と考えることで、デジタルの利便性だけをとらえて、その危険性を軽視していることを示している。そして、「このデジタルの船の中で、『思考する習慣』を維持し続けるということは意外と難しい」と、デジタルの危険性を述べていることをおさえる。

5、デジタルをこれまでよりも「もっと偉大な創造を成し遂げるチャンス」ととらえて、「思考することの価値」を理解し、情報や知

識を利用して、「思考する習慣」を維持しようということである。

Step 2

二

解答

〔問1〕イ　〔問2〕エ　〔問3〕ア　〔問4〕ウ

〔問5〕（例）本文では、化石燃料の使用による環境問題が取り上げられています。人間の生存に適した環境を未来まで守るために、今できることが数多くあります。たとえば、私は家の自動車での送り迎えに頼らず、公共交通機関を利用することにしています。街中の自動販売機の数を減らすことも大きなエネルギー節約になるそうです。日常生活が多少不便になっても、こうしたことを実行することが、環境の持続可能性への取り組みになると思います。（200字）

解説

〔問1〕「公害問題」や「乱獲による動物や植物の絶滅」という問題は、容易に民意が形成されるように、因果関係が「明確で単純」であり、「一度理解されると対応策が明らか」になるものである。これに対して「地球の温暖化」や「生物多様性の減少」の問題は「ずっと多岐にわたる」とある。こうした対比に着目して、「地球の温暖化」や「生物多様性の減少」の問題を考える。

〔問2〕問題は「地球生態系の持続可能性」ではなく、「人間という生物が心地よく…環境の持続可能性」であり、「人間自身が環境を変化させることにより…変わってしまうかもしれない」と、筆者は考えている。

〔問3〕第九段の冒頭の「その」は、前段落の「人間の生存に適した環境をのちの世代まで続けて残していくこと」を指している。そのための対策として「現在の生物多様性を保っていくこと」を示し、生態系の中の「食物網」を取り上げている。

〔問4〕「同じような機能をはたしている種がいくつも存在」することは、第十段で「いろいろな種の機能が重複」すること、つまり「冗長性が高い」ことと説明されている。第十一段では「冗長性は、かく乱に対する抵抗力の強さとして働いている」と述べ、「同じような機能を…何種もあるのならば、それらの一つが絶滅してもたいした影響はない」という考え方を否定している。

Step 3

三

解答

〔問1〕エ　〔問2〕全然ことばを介さないコミュニケーション（19字）　〔問3〕(1) あらそい　(2) ウ　〔問4〕ア　〔問5〕エ
〔問6〕席を譲るよう若者に冷静に要求すること。（19字）・若者の言い分を聞こうとすること。（16字）（それぞれ同意可）
〔問7〕全体の空気を察して、言葉以上のものによって動くこと
〔問8〕（例）私はⅡの考えに賛同する。相手に対する気づかいは持っていたいが、全体の空気を必要以上に気にしすぎると、だれも発言できなくなって、わだかまりや不満が大きくなることが多いと感じる。自分の考えや意見を言葉にするとき、まず頭の中で整理する間に気がつくことがたくさんある。そして、言葉によって具体的に相手に伝えて、反応を引き出し、必要ならば議論した方が、お互いに納得してよりよい結論にたどりつけると思う。（10行）

解説

〔問1〕「理解した」という意味で使われている。
〔問2〕「目で言っちゃう」「目で答える」というように、ことばを話さないやりとりである。
〔問3〕(1) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。(2) 相手の気持ちを傷つけないように、言わなければいけないことをはっきりと言うことを我慢して相手に従うということ。
〔問4〕上着を忘れたのは「客がうっかりしていた」からなのに、自分たちの気がきかなかったからだと考えている。
〔問5〕「言葉による自己表現」が「生命」ともいえる学問なのに、「議論」や「弁論」をすることなく、知識だけしか学ぼうとしない若者の態度を嘆いている。
〔問6〕中年の男が怒鳴った理由を考察した後で、「ただ…すればよいのです」と述べている。また、「場合によったら、彼はそれなりの理由で座っているかもしれない」と考え、「いかなる彼の言い分も聞かない」で怒鳴ったやり方に疑問を呈している。
〔問7〕相手が口ごもっている様子から相手の気持ちを察し、別の提案をするなどの行動に出ることを表した部分をおさえる。